
『勇者』を押し付けられた勇者

ランプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『勇者』を押し付けられた勇者

【Nコード】

N7639U

【作者名】

ランプ

【あらすじ】

貧乳娘の神元唯は、ある日トラックにはねられ、次の瞬間には真っ白い『待合室』と呼ばれる空間にいた。そこに現れた自称営業マンは唯に次の生き方の選択肢を突きつける。選択した唯が次に気がついた時には、彼女は『勇者』となっていた。

序章（前書き）

冒頭部分で別作品の『魔王に召喚された勇者』とかぶる所が多々ありますが、今後のストーリーは別物になる予定です。ご了承ください。

序章

暑い日差しが、背中を焼いている。

耳からは一週間の生を謳歌する虫の鳴き声が喧しく入り込み、日差しとはまた違った手段で神経を焼く。しかも、近くで何か工事をしているらしく、その作業音がまたひどい雑音として耳の神経を痛めつけてくる。

ジリジリとした痛みを感じる程の熱射に眉をひそめながら空を見上げれば、嫌味なほど涼やかな青が見えた。

大きな入道雲が空の一部にかかっている。存在感のあるその入道雲をボウっと見ていると

「やっほ！ 唯！」

後ろから汗で少し塗れた背を、力いっぱい叩かれた。

「……痛いよ、美幸」

「ごめんごめん」

暑さを吹き飛ばすように笑った美幸は、そのまま唯の隣を陣取り同じスピードで歩き始めた。

ジリジリと日に焼かれていた背中が、今度はジンジンと痛み出す。きつと服を脱げば背中に紅葉のような手形が出ているだろう。

「一瞬後ろから見たら気づかなかったよ。どうしたの、その格好？」

美幸はそう言うと、唯の姿を上から下まで見つめた。眉をひそめ

ながらも、その表情はどこか楽しげである。

「……罰ゲームだよ」

唯は気だるげに答えた。

暑さにやられながら黙々と歩く唯の姿は、遠目からは少年のように見える。男物の服に、短く切りそろえた黒髪。怠惰な性格を匂わせる半眼の瞳。

しかし近づく、その気だるげな雰囲気とは真逆の若々しい美しさに目をひかれる。

半分隠れてはいるものの、見る者を引き込むような深く澄んだ黒の瞳。これといってワックスなどもかけてないが、それ故に自然な美しさを醸し出す短めの黒髪。唇は不機嫌そうに閉じられているが、どこか危うげな色香を持った可愛らしく健康的な桃色である。

これで胸があれば美少女の出来上がりなのだが、唯の胸もとには僅かな膨らみもない。

そんな唯を見て、美幸は悲しそうに言った。

「……唯ちゃんのささやかなおっぱいはどこにいつてしまったのかな？」

「ささやか言うな！ ……サラシで潰してるんだよ」

先日、友人とのちょっとしたゲームで敗北した唯は、罰ゲームとして今日、男装してくる事になったのだ。唯としては『兄貴の男物の服を着てくればいいか』ぐらいに考えていたのだが、罰ゲームを命じた友人がそれを許さなかった。

『もちろん、罰ゲーム当日にはサラシを巻いてそのささやかな、ちっぱい……失礼、おっぱいを隠してきてよね』

ひどい言われようだ。と言うか、何故自分の周りには他人の胸の大きさを気にする輩が多いのだろう。人の胸が大きかろうが小さかろうが、それこそメロン並でもアンパン並でもどっちでもいいではないか。そもそも人を判断するのに何故胸を見るんだ。あれは脂肪だ。女が忌み嫌うはずの脂肪ではないか。それをまるで何かの勲章のように見せびらかす様は哀れを誘う……別に巨乳が羨ましくて嫉妬をしているわけではない。断じてない。どちらかと言うと貧乳である私の方が哀れみの視線を向けられる事が多いがそんな事はどうでもいい。重要なのは体幹上部を覆う脂肪などではなく、その下、奥底にある心意気というものだろう。

などと、はたから見ても哀れな女の嫉妬としか思えぬ事を考えながら、唯は暑いアスファルトの道を黙って歩いていた。

「あゝ、あの罰ゲームって今日だったっけ。て言うか、本当に男装してきたんだ」

美幸は驚いたように瞳を見開き、さらにジロジロと嘗め回すように唯の姿を見た。こんな暑い中でも美幸は唯とは違い元気が有り余っているようだ。ぴよこぴよことスキップしながら、唯の周りをぐるりと回った。

「唯は中性的な顔してるのに、ちっちゃいからまるで少年みたいだねえ」

「うーるーさーいー……」

唯は美少女とも美少年ともとれる顔立ちをしつつも、身長が150ちよいしかない。そのため、よく中学生に間違われるのだ。

もちろん、間違われる本人としては、いい気分はしないのだが。

そんなふうには美幸と他愛もない会話をしていると、目の前の信号が赤に変わった。暑さにやられた唯はその信号をボクッと見ていた。強い日差しの中で、その赤はどこか毒々しく、何かの凶兆のように感じられた。

——馬鹿らしい。

自分のその唐突な考えに唯はそう心の中で吐き捨てた。

唯はどちらかと言うと現実志向な性格で、UFOや幽霊は勿論の事、よくテレビに出てくる『海外で活躍している超能力者!』という物もまったく信じていなかった。

そんな彼女は、勿論第六感などという存在を信用するはずもなく、なんの根拠もなく感じる所謂『嫌な予感』などこれっぽっちも信じちゃいなかった。

だが彼女は今後の人生においてこれらの見解を誤りだと認識するようになる。と言うか、数十秒後には信じなかった事を後悔するのである。

彼女の目の前で、あの不吉に感じた赤の信号が青に変わった。日差しが強いにも関わらず、唯の目に明瞭にうつったその色に違和感を持ちながらも、唯は車道へと足を踏み入れた。

一步、また一步。

歩く度に現実感がなくなっていくような感覚がする。あまりの暑さに脳がやられたのだろうか。

ふと、そんなどこか陶然とした唯の意識に触れる音がした。それはさっきまで隣にいたはずの美幸の声。

『……っ！ ……………っ！！』

何を言っているのだろう。声は聞こえるのに意味を理解する事ができない。脳の言語中枢でも焼ききれたのだろうか。

ふと、美幸が腕を上げ、ある一方を指差した。その様子はまさに必死そのもので、なにか大変な事態が起きていることはわかった。

美幸が指差す方へと視線を向けると、そこには唯の何倍もあるトラックが猛スピードで向かってきている光景があった。

土砂を積んだそのトラックは、唯の姿など見えていないかのように一直線に唯へと突進してくる。

その現実離れた光景に慌てた唯は、逃げるよりも信号の方を見てしまった。

（青だったはずなのに……っ！ あのトラック信号無視か！？）

しかし唯が信号の方を振り向くと――

「え……？」

信号はあの毒々しい赤色を示し、彼女にこう告げていた。

渡っては駄目。渡っては駄目だけど君は渡ってしまった。君は渡ってしまったんだ。と。

「なん……で」

その赤は陽炎の中揺らめき、どこか楽しげに踊っているかのように見えた。まるで唯のすべてを笑うように。まるで唯の終わりを祝福するかのように。

後ろからはトラックがすぐそこまで来ている音がする。もう逃げられない。小さな唯には、大きなトラックから逃れる術などない。

「唯――――っ！――！！」

美幸の断末魔のような叫びが、唯がこの世界で聞いた最後の音で

あつた。

世界を超えてこんにちは

唯は気がつくとも真っ白い世界にいた。体は水の中にいるかのように浮き、不確かに浮遊していた。

（ああ、死んだのか、私は……）

人間、どうしようもない事態になると諦めの境地に達してしまうものようだ。唯は死んでしまったという事実を、意外とすんなり認める事ができた。ただの諦めではあるが。

（この後どうなるのかな……）

周りを見渡すと、死神や天使らしき影は見えなかった。ただ唯だけがポツンとその白い空間に存在している。

白い世界に浮いて、どれほどの時間が経った頃だろう。唯が遺してきてしまった家族や今後の事を考えるのにも飽きてしまった頃、その存在は現れた。

「こんにちは」

その存在は、あえて言うなれば営業マンだった。平凡な顔立ちに胡散臭い笑顔を張り付かせ、糊のきいたスーツを着こなし、綺麗に磨かれた革靴で唯の前に現れた。

手元には資料と思われる紙の束を持ち、ぺらぺらと忙しく捲りながら話し出した。

「ええっと、かみもと ゆい神元唯さん、享年18歳ね。あー、ずいぶんお若くお亡くなりになっちゃいましたねー。ええと、大量の土砂を積んだト

ラックにはねられ即死……信号無視ですか、駄目ですよ？　ちゃんとルールは守らないと。まあ運命だったんだから神元さんには非はないんですけどね。あ、神元さんあなたの個人情報の確認よろしくお願いします。生年月日、名前、年齢など一応確認してくださいね」

営業マンはつらつらと言葉を吐き終えると、手元にあった資料の一部を唯に差し出してきた。

「これって……」

そこには撮った覚えのない唯の顔写真と、恐ろしいほど細かい唯の経歴が書かれていた。個人情報どころの話ではない。唯自身が忘れていたような事まで書かれている。

「なんだよこれ……なんでこんな物が」

「質問は後ほどお願いします。まずは誤表記等の確認を」

すげなく言われた唯は、混乱する頭でとりあえず名前、生年月日などを確認した。

「……あつてるけど……いったいこれは何なんだよ。そもそもここはどこなんだ？　天国？　地獄？　それとも単純に死者の世界か？　あとあんたはいったい何者？　死神にも天使にも見えないし、だからと言ってただの人間とも思えない。私のこんな事細かな資料と言い……いったい私をどうするつもりなんだ？」

「まあまあ落ち着いてください神元さん。混乱する気持ちもわかりますし、今までの方々も大半は不安を感じていましたからあなたの

お気持ちも理解できますよ？　ですが、まずは落ち着いて……」

今までの方々……？

つまり今までも唯と同じ状況に陥った人間が存在していたという事だ。

「……その今までの方々ってのは、どうなったわけ？」

信号の時に感じた不吉な予感が、唯の胸の中にわきおこってきた。ガンガンと警鐘を鳴らすように心臓の鼓動が早くなる。それと同時に嫌な汗がぼたりと顔を伝い落ちた。

「今までの方々ですか？　そりゃまあ、いろいろですよ」

「いろいろ？」

唯としてはその『いろいろ』の部分を是非とも詳しく聞きたい。

「そうですねーいろいろ。たとえば魔王になったり神になったり猫になったり魔獣になったり触手になったり……ああ、たまに性別が変わる人とかもいますねー」

「……………」

（ああ、どうしよう……）

まさか死んだ後に頭のおかしい人からまれるとは思わなかった。そもそも相手は人なのかすらも怪しいという……。

「あ、その顔はあれですね？　信じていませんね？」

その言葉に吃驚した顔を見ると、男はしたり顔で『まあ皆さん同じような反応ですもんね』と言った。

「まあどうせ何を言っても『信じられない』『ふざけているのか』とか、『これは夢だ』とか言うんでしょから私は別にかまいませんけどね。ええとまずはこれが何か……ですよ？ これは見ての通りあなたの個人情報……まあ詩的に『神元唯の歴史書』とでも言いましょうか。ご覧の通り、あなたが今まで歩んできた人生のすべてはここに記されています。あなたが隠したいと思った過去も、あなたがなかった事にした過去もすべてね」

そう言う男は、紙の束から一枚の資料を取り出し、唯の前に突き出した。そこには、かつて唯が葬ったはずの過去——思春期の黒歴史が堅苦しい文体で延々とつづられていた。

「……っ！」

唯は顔を真っ赤にし、反射的にその紙を奪い取ろうとした。しかし、男はそのひよろりとした外見に似合わず、サッと素早い動きで資料を唯から遠ざけた。

「本当に皆さん同じ反応をしますね。こういう風に過去を示すと、大体あなたと同じようにこの紙を破り捨てようとするんですよ。紙を破り捨てたところで過去は変わらないのに。で、次はここがどこか。まあ簡単に言ってしまうばあなたの言うとおり死後の世界……私達は『待合室』と呼んでいます。人生というお勤めを終えた方々には一度個々にこの空間でお待ちいただけます。で、次に私が何者なのか……ですね」

男がつつら喋っている間も、唯はどうか紙を奪い取ろうと四苦八苦していた。しかし、以外と背の高いこの営業マンが紙を上にかざしてしまつては、元々チビの唯には到底奪い取る事はできなかった。

肩で息をしつつ、奪う事は不可能と結論付けた唯は、とりあえず男の話を黙って聞く事にした。諦めたとも言うが。

「私はまあ……言うなれば……そう、あなたが持った印象そのままでの『営業マン』でしょうか。ここにやってきた方々に新しい人生を営業する営業マンですね」

男はそう言う『うんうん』と一人で勝手に納得しだした。唯にとつてはまったく意味がわからない。そもそも説明になっていないふと、ここで、唯はある違和感を持った。それは不気味な寒気を伴うもので、唯にとつて少し前のあの信号での出来事を思い出させる違和感だった。

「……私……あんたに営業マンなんて言つたか……？」

「いいえ？　でもそう思つたでしょう？　胡散くさい笑顔だとも」

サアツと……死んだ後も流れているのかわからない血流が引いた気がした。嫌な寒気がし、手先が冷たくなるあの嫌な感覚。

「心が、読めるのか……？」

静かに、慎重すぎるほどの緊張感を持って尋ねると、男はあの胡散臭い笑みを深め、言つた。

「当然でしょう？　私はあなたの『営業マン』ですからねえ」

世界を超える選択

「あなたに提示された選択肢はいくつかあります。まず違う世界に動物として生まれる事」

「動物……？」

指を一本立てつつそう言った男は、どこかうっとりとした表情で語った。

「そう！ 動物！ 可愛いウサギでもいいですし、ここは冒険して逞しい獅子なんてのもいいですねえ。私としては猫が一押しなんです……」

どうやら比喻でもなんでもなく、本当に動物になれと言っているらしい。自慢ではないが、唯はあまり動物が好きではなかった。

離れて見る分には可愛いと思えるのだが、近づくとその溢れ出るようなイキイキとした生命力に怯んでしまう。

軽々とした身のこなしを見てすごいとは思えるが……同じものになりたいとは爪の先ほども思わない。

「……動物はなしの方向で」

「何故！？」

「いや何故って……」

彼は本気でわからないというような表情をし、しきりに『何故皆さんいつも動物になる事を拒否するのでしょうか！ あんなに可愛い

のに！ あんなに勇ましく美しいのにつ！！』と嘆いている。

「動物はなしですかそうですか……個人的には残念でなりませんが、ご本人が拒絶するなら仕方ありませんね。では第2の選択肢、元の世界で霊体となり漂い続けるか」

「れいたい？」

急に聞きなれない単語が出てきた。だがなんとなくわかる。
きつと唯にとっていい話ではない。

「はい、霊体とは平たく言えば幽霊……幼稚な言い方をすればお化けですかね？ まあ漂い続けると言っても、あなたの自我が保たれている間の話なんですがね。まあもって2、300年というところでしょうか？ 中には気概がなく2、3年で個としての自我を失ってしまう方もいらっしゃるんですよ？ その点で言うと神元さんの自我は強い強い。まだお若いのに個としての枠がシッカリしてますねー。羨ましい」

……にこやかに何を言うかと思ったら幽霊になってそこらへんを漂いますか？という提案をしてきた。

「……霊体もなしで」

「そうですか。これも皆さんからは不評でしてねー。いったい何が駄目なのか皆目わからないんですよ。それでは次が最後になります
が、『他の世界で新しい人生を送る』ですね」

「新しい……人生？」

「はい。まあ言うなれば転生ですね。ただこの転生にもいろいろありまして、本当に最初から——生まれるところから始める人と、知識や姿をそっくりそのままに違う世界に渡る人、そして最後に、これは相手方の了承も必要なのですが、すでにその世界にいる人と人生を交換する人……などですね」

それはまるでよくある物語——俗に言うトリップ物と同じように思える。だが世にあるトリップ物の大半は主人公が望んだ結果のトリップではなく、巻き込まれた形でのトリップであるのに対し、この営業マンが薦めるのは、自らの意思でのトリップのようだ。

「神元さんの場合、今現在トリップを望まれている適合者——ああ、人生を交換するにも相性がありまして、その相性が合う相手を適合者と私達は呼んでおります——その適合者が今のところいないんですよ。ですから、神元さんは今回残念ながら他人との人生交換はできません。この件についてはご了承ください。あと残された選択肢は2つ。まっさらな状態で新たな命として異世界に生れ落ちるか、今の『神元唯』として異世界に落ちるか、そのどちらかですね」

「……元の世界に『神元唯』として帰る事はできないの？」

一縷の望みをかけた言葉だったが、その願望を営業マンはあっさり「無理です」と切り捨てた。

「それは選択肢にありません。一度死んだ世界に蘇る事だけは、決して誰にも許されないのです」

「そう……」

今の『神元唯』を捨て、新たな人格を作るか、今の『神元唯』を

守り、新たな世界に馴染むか……二択の究極の選択である。

少なくとも、新たな生を得れば、そこには新たな『唯』を産む母親がいる。おそらくは庇護され生まれ育ち、大きな不幸もなく生きる事ができるだろう。

だがそれは、同時に今の『神元唯』のすべてを殺すことと同義だ。今度こそ『神元唯』という存在は消え去り、二度と生まれることはない。

そう考えたとき、唯は足元からすべてが崩れ去るような錯覚を感じた。

今まで両親に愛され慈しまれ、良き友人たちに恵まれ育んできたこの『神元唯』を自分自身の手で消し去る。

それはまさに、自分を愛してくれた人たちへの裏切りではないのか？

これは一見、私個人を——私だけを葬るように見えるが、その実、今まで私の人生に関わってきたすべての人達をも葬る行為なのだ。

そう考えた瞬間——唯の心は決まっていた。

たとえ元の世界に、愛しい家族や友人たちの下に帰れないのだとしても、彼らが生み出してくれた『神元唯』を殺す事だけはしたくない。

してはいけないのだ。

「……決まったよ」

「おや、早いですね。大半の方々はなにやら無駄に悩み、時間を刻々と無駄にし、やがて時間切れとなるんですけどねえ」

「時間切れ？」

「そうです。私達にも都合というものがありません、選択するのはタイムリミットがあるのです」

「……そのタイムリミットを迎えるとどうなる？」

「勿論、選択する事ができなかった優柔不断な方々は、こちらで用意した未来に進んでもらいます」

「用意した未来？」

「はい。最初にあなたが言ったところですよ。『地獄』と『天国』にね」

男はあの胡散臭い笑みをしながら手を背後へと向けた。するとそこには、先ほどまでは存在しなかった扉が2つあり、片方からは阿鼻叫喚、もう片方からは軽やかな歌声が聞こえてくる。

「……まあ、大半の方は地獄行きなんですけどねえ」

ニタリ……まるで絡みつくような粘着質なその笑みは、今までの胡散臭い笑みとは違い、男の感情がありありと見えた。

侮蔑、歓喜、嘲笑、そしてほんの少しの哀れみ。

「……………」

この男は、天使でも神でも死神でもない。だが、悪魔ではあるのかもしれない。

「ではお聞かせ願いますか？ あなたの選択を」

「私は……この『神元唯』を殺したくない。この『神元唯』をそのまま次の生に持ってゆきたい……それが私の選択だ」

男はその答えを聞き、別段驚きもせずあの胡散臭い笑顔で「わかりました」と言った。

それはまるで、元からわかっていたかのような、知っていたかのような態度に見えて、私はまたあの嫌な違和感がわき起こるのを感じた。

「では、あなたが新たに生きる世界へお連れいたしましょうか。これからあなたには様々な運命が降りかかるでしょうが……まあ、なんとするか……諦めてください」

「は？」

そう言った男の顔には、あの胡散臭い笑顔も、嘲笑や侮蔑が入り混じった表情でもない、どこか苦い色を持った苦笑が浮かんでいた。

「いつてらっしゃい『神元唯』。あなたの『役割』に幸多からんことを」

滲む世界の中で、男の苦笑の混じった声だけが、長々と尾を引いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7639u/>

『勇者』を押し付けられた勇者

2011年7月11日15時06分発行